の崎と、此島のあはひ二十餘町ばかりへだてたる中に、小じまのさと〳〵ゑげにてみゆるひとつ侍、これなんこぐろ島といふなるべし、此島のあたりをばあたといぞいふなる、

島もりにいざことはんたがために何のあたといぞ名にしおひけむ、その南にあたりて、かすめる島々あり、まさかりのせといぞ申なる、此國と伊豫の國とのさかひにて侍るとかや、海のうへに國のさかひのみゆるこそめづらかなれ、略○中島の四方に入江どもあまた有て、見所かぎりなく侍るなり、百浦侍るとぞ申、

〔嚴島道芝記〕〔一〕いつくしまは、安藝國佐伯郡の海の中にあり、めぐり七里、東西北の三方、地を相さる事、遠きは四五里、ちかきは一里ばかりなり、南の方は、はるかに伊與の二名のしま、つくしの海までも見ゆ、山そびえ、江めぐり、くま〳〵まで松おひしげり、うら〳〵の名所、岡谷の舊地、百にあまれり、略○中もとはおんがのしまと名づけ、宮ゐしたまへる所をば、みかさのはまといふ、おんがといへる事は、明神鎮座おはしまして、神の御香のふかきゆへなりとかや、略○中又みやゑまといへるは、此神の宮地の島なるゆへに稱せる名なり、略○下

〔嚴島圖會〕〔一〕嚴島は安藝の國西海中にあり、府城廣島を去ること五里、佐伯郡に屬せり、島周廻七里、西北を面とし、東南を背とす、遠くは伊豫周防の地を望み、ちかくは佐伯郡の地方に對せり、舊島號は恩賀島、また御香島、あるは霧島、我島など稱へりといふ說あれどさだかならず、おもふにこの島、もとはさせる名もなかりしに、御神の鎮坐し後、その神號の市杵とかよはして、頓て伊都岐島とは號たるならん、類聚國史、延喜式、三代實錄、山槐記、拾芥抄等の諸書、みな伊都岐島とあり、後世專ら嚴島（イツクシマ）と稱へたり、是もまたその音のかよへるゆゑなり、略○註また宮島といへるも、其唱既に久しくして、高倉帝御幸記及び殊域の書、登壇必究、圖書編等にもみな宮島とかけり、島のうちに七浦八景の稱ありて、日本三名區の其一なり、略○下